

第二十九回 齋藤茂吉短歌文学賞

大辻 隆弘 『景德鎮』

砂子屋書房

選考委員

委員長

三枝昂之

委員

小池 光

小島ゆかり

永田和宏

【贈呈式】

平成三十年五月十三日(日)

(五十音順)

大辻 隆弘 『景德鎮』

(自選)

何なすとなき冬の日を青鈍あおにびのひかりにゆがむ河口まで来つ

梨の花の白さが遠くまで届き暮れむとしたる丘陵はあり

さびしいと言ふのは罪かうサマ・ビン・ラディンしづかに殺害されて

稀勢の里の取組ももう見なくなり北窓の部屋に父はまどろむ

氷ひのごときひとと触れなば和なぎゆかむ炎ふちの縁ふちをよこぎれる雪

死は可算名詞ではない数ふるを許すことなき無音の広がり

息ひとつ吸ひて一つをほき出だす今日ながらふる父のいのちは

静かなる父の寝息を聞いてをり吾は少年の心となりて

鴉浅葱といふ色ありてときあさぎいろに暮れゆく窓に寄りにき

美しく煙のかたち立ちあがる季節とおもふ冬のはじめは

大辻氏の歌業をよろこぶ

三枝 昂之

今日もつとも精力的な歌人である大辻氏の受賞をま
ずは喜ぶたい。『景德鎮』の特色の一つは地道すぎる
と見える世界にある。

五階より見おろす野辺は押し枯れて冬野に沈むま
へのしづけさ

こうした細部を逃さない的確な描写は、近代短歌が
大切に育んだ風景と暮らしの融合こそがこれからの短
歌の一つの根拠となるといふ彼の短歌観の反映であ
る。その姿勢が心強い。

息ひとつ吸ひて一つをほき出だす今日ながらふる
父のいのちは

もう一つの特徴は、看取り前後の父との暮らしであ
る。死者と生者に分かれる他ない父と子の宿命を詠っ
て、その悲嘆を抑えながらの叙述がしみじみと味わい
深い。今日の短歌にまた一つの成果が加わった。

ゆるぎない志

小島 ゆかり

ゆるぎない志を貫く歌人である。歌にも評論にも、
みずからのルーツを見つめる強い眼差しを持ち続ける
歌人である。

齋藤茂吉を中心に据えた近代短歌がもたらしたもの
は何なのか。そのことにこだわり、現代短歌へ継承し
ようとする粘り強い努力が、大きな成果を上げた歌集
と思う。

いつまでも犬が鳴いてた ゆるゆると津波が襲ふ
映像の隅で

父の死を予定して前に倒したるひとつ仕事を埋め
てをりぬ

妹が杉村春子のやうになり生前贈与といふを指
図す

鴉浅葱といふ色ありてときあさぎいろに暮れゆく
窓に寄りにき

リアリズムに基づく簡潔な表現が、ときに普遍的な
生の断面を見せ、またときに思わぬユーモアを生み出
す。まことに齋藤茂吉賞にふさわしい。

更なる深化を

小池 光

昭和三十五年生まれの大辻隆弘氏もいつか五十代も
後半にさしかかる年齢になった。評論、研究、講演ま
た歌会活動、そして短歌実作などいまもつとも短歌
界で精力的に活動している一人である。

今回の授賞歌集『景德鎮』は九冊目の歌集にあたる。
八十歳で他界した父を見送る歌が中心になっており、
やすらかに、しかししみじみと読ませる歌に、氏のキャ
リアと成熟、そして短歌への熱心を見る思いがして、
委員の推すところとなった。

妹が杉村春子のやうになり生前贈与といふを指
図す

死は観念的なことではなくて、現実の上にも現実、
生活の上にも生活の出来事である。

右の歌のリアルさなどは、実に臨場感があり、思わ
ず頷くものがあつた。実作、評論ともに、今後の更な
る深化を望むものである。

信頼できる後続世代

永田 和宏

私などの年齢になると、次に誰が歌壇を担ってくれ
るのだろうかと真剣に思うようになる。大辻隆弘さんは、
私が個人的にもつとも信頼を寄せる後続世代の一人で
ある。その大辻さんがいよいよ齋藤茂吉賞ということ
になり、何にも増してうれしいことである。

大辻さんは、これまでもアララギに関する多くの論
考を発表してきた。佐藤佐太郎をはじめとする写生の
基本を深く理解し、具体とディテールに拘った落ち着いた
いた作風を展開してきた歌人である。『景德鎮』はそ
のような従来の詠風の熟成のなかに、父の死という
テーマが正面に顕れ現われ、その切実性に力がある。
情をとことんまで抑えて、酷薄とも思えるまでの細部
への拘りに、却って悲しみが染み透るようだ。

父の死を予定して前に倒したるひとつ仕事を埋め
てをりぬ

そのような不在の父に向き合うような日常のなか
で、中年を過ぎようとする男のエロスが垣間見えるの
も、歌集としての艶と言ふべきだろう。

受賞のことば

大辻 隆弘

このたびはこのような大きな賞を授けていただき光栄に存じま
す。選考委員の皆さまに心より御礼申しあげます。また、岡井隆
先生はじめ、私を支えてくださった皆さま、本当にありがとうございます
ございました。

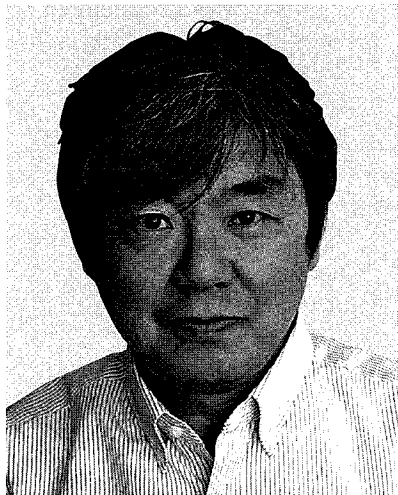
私が生まれて初めて買った歌集は、岩波文庫の『斎藤茂吉歌集』
でした。大学院の哲学科に通っていた二十三歳の冬でした。先の
見えない日々のなか、京都の下宿で毎夜、この歌集に収められて
いる歌を二回ずつ声に出して読んでゆきました。

擬宝珠も羊歯も萌えつつゆく春のくれかかる庭ひとり見にけり

『白桃』

このような歌の底に流れる茂吉の深い孤独に心を揺さぶられま
した。その体験が私の歌の原点になっています。

深く敬愛する斎藤茂吉の名を冠する賞をいただき、身の引き締
まる思いです。この賞に恥じぬよう、これからも精進いたします。



第29回 齋藤茂吉短歌文学賞受賞者歴

大辻 隆弘 (おおつじ たかひろ)

歌人。高校教諭。

1960年(昭和35年)三重県生まれ 57歳。

龍谷大学大学院文学研究科(哲学)修了。

1986年(昭和61年)未来短歌会入会、岡井隆氏に師事。現在「未来」選者。

現代歌人協会会員、元現代歌人集会理事長、中部日本歌人会副委員長、
日本文藝家協会会員、「レ・パピエ・シアンⅡ」代表。

【主な著作等】

歌集：平成元年『水廊』、平成5年『ルーノ』、平成10年『抱擁韻』、
平成14年『デプス』、平成19年『夏空彦』、平成19年『兄国』、
平成24年『汀暮抄』、平成29年『景德鎮』

著書：平成8年『子規への溯行』、平成19年『岡井隆と初期未来』、
平成20年『時の基底』、平成21年『アララギの脊梁』、
平成27年『近代短歌の範型』、平成29年『子規から相良宏まで』

受賞歴：平成10年 第24回現代歌人集会賞、平成15年 第8回寺山修司短歌賞、
平成22年 第12回島木赤彦文学賞、第8回日本歌人クラブ評論賞、
平成28年 第3回佐藤佐太郎短歌賞

これまでの受賞者

- | | | |
|-------|-------|--------------------------------|
| 第一回 | 岡井 隆 | 『親和力』 砂子屋書房 |
| 第二回 | 本林勝夫 | 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社 |
| 第三回 | 塚本邦雄 | 『黄金律』 花曜社 |
| 第四回 | 前登志夫 | 『鳥獣蟲魚』 小澤書店 |
| 第五回 | 斎藤 史 | 『秋天瑠璃』 不識書院 |
| 第六回 | 近藤芳美 | 『希求』 砂子屋書房 |
| 第七回 | 小暮政次 | 『暫紅新集』 短歌新聞社 |
| 第八回 | 馬場あき子 | 『飛種』 短歌研究社 |
| 第九回 | 吉田 漱 | 『白き山』 全注釈 短歌新聞社 |
| 第十回 | 佐佐木幸綱 | 『呑牛』 本阿弥書店 |
| 第十一回 | 伊藤 博 | 『萬葉集釋注』 集英社 |
| 第十二回 | 森岡貞香 | 『夏至』 砂子屋書房 |
| 第十三回 | 竹山 広 | 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房 |
| 第十四回 | 藤岡武雄 | 『書簡にみる齋藤茂吉』 短歌新聞社 |
| 第十五回 | 清水房雄 | 『獨孤意尚吟』 不識書院 |
| 第十六回 | 小池 光 | 『滴滴集』 短歌研究社 |
| 第十七回 | 三枝昂之 | 『昭和短歌の精神史』 本阿弥書店 |
| 第十八回 | 花山多佳子 | 『木香薔薇』 砂子屋書房 |
| 第十九回 | 永田和宏 | 『後の日々』 角川書店 |
| 第二十回 | 河野裕子 | 『母系』 青磁社 |
| 第二十一回 | 伊藤一彦 | 『月の夜声』 本阿弥書店 |
| 第二十二回 | 品田悦一 | 『齋藤茂吉―あかあかと一本の道とほりたり―』 ミネルヴァ書房 |
| 第二十三回 | 篠 弘 | 『残すべき歌論―二十世紀の短歌論―』 角川書店 |
| 第二十四回 | 秋葉 四郎 | 『茂吉幻の歌集』 『萬軍』 ―戦争と齋藤茂吉― 岩波書店 |
| 第二十五回 | 栗木 京子 | 『水仙の章』 砂子屋書房 |
| 第二十六回 | 小島ゆかり | 『泥と青葉』 青磁社 |
| 第二十七回 | 柏崎 驍二 | 『北窓集』 短歌研究社 |
| 第二十八回 | 橋本 喜典 | 『行きて帰る』 短歌研究社 |

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇―八五七〇 山形市松波二丁目八一―

山形県観光文化スポーツ部県民文化スポーツ課内

TEL・〇三三―六三〇―二九〇三